

死別体験後のソーシャル・サポートと心理的適応に関する予備的検討

著者名(日)	福岡 欣治, 安藤 清志, 松井 豊
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	4
ページ	55-60
発行年	2004-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000544/

The Influence of Social Support on the Psychological Adaptation to Bereavement: A Preliminary Examination

福岡 欣治

文化政策学部文化政策学科

Yoshiharu FUKUOKA

Faculty of Cultural Policy
and Management

Department of Regional
Cultural Policy
and Management

安藤 清志

東洋大学社会学部

Kiyoshi ANDO

Faculty of Sociology
Toyo University

松井 豊

筑波大学心理学系

Yutaka MATSUI

Institute of Psychology
Tsukuba University

身近な人との死別は人生の中で必ず起こることであるが、一方で、死別による心理的反応や対処の仕方には大きな個人差がある。本研究では、遺族にとってのソーシャル・サポートに注目し、ソーシャル・サポートと死別に伴う心理的变化および現在の精神的健康状態との関係について検討した。調査対象者は5つの大学の学生とその家族であり、過去10年以内に身近な人との死別経験のある543名（18-24歳：384名、40-59歳：159名）を分析対象とした。主な測定内容は、死別後および現在のソーシャル・サポート、死別後の肯定的および否定的な心理的变化、現在の精神的健康度であった。相関分析の結果、死別後のソーシャル・サポートが肯定的な心理的变化を促し、その変化が現在の精神的健康を促進することが示唆された。

Bereavement is an inevitable fact of life. There are individual differences in psychological reactions and coping strategies related to bereavement. This study examined the relationship between (1) social support immediately after the bereavement and at present; (2) positive and negative psychological changes after bereavement; and (3) the current state of mental health. Participants were 543 people, 384 university students (aged 18 to 24 years) and 159 of their family members (aged 40 to 59 years), who had experienced bereavement within the last 10 years. Correlation analysis indicated that social support after the bereavement was positively correlated with positive psychological change, which in turn was positively correlated with improved current mental health status.

問題と目的

人は生きている限り、必ず自分以外の身近な人たちの死を経験する。それは多くの場合、強い悲しみを伴う辛い体験である。しかし同時に、人として不可避であるがゆえに、乗り越えねばならない体験でもある。

死別後の心理的反応および対処の仕方には、大きな個人差がある。松井・鈴木・堀・川上（1996）によれば、遺族の悲嘆からの回復過程に影響する要因は、遺族自身の要因、故人および故人と遺族との関係、死の状況、死や災害のとりえ方、死別後の家庭状況など、様々なものがある。實際上、これらの要因は複合的に絡み合っており、死別体験者の心理的反応を左右していると考えられる。

本研究では、特に遺族のソーシャル・サポートに注目し、死別に伴う心理的变化および現在の精神的健康との関連について検討する。ソーシャル・サポートはストレス緩和要因として従来から広く認識されているが、死別に関する研究でも一部に取り上げられており（たとえば Stylianos & Vachon, 1993; Vachon & Stylianos, 1988 を参照）、わが国でも、宮本（1989）、岡林・杉澤・矢富・中谷・高梨・深谷・柴田（1997）などの研究がある。多くの研究で、死別後のソーシャル・サポートは心理的苦痛を防ぐ効果があることが報告されている。

ところで近年、ストレス経験とそれへの対処を通じた人の心理的成長あるいは肯定的な心理的变化に注目する動きがみられるよ

うになってきた（たとえば Tedeschi, Park, & Calhoun, 1998; Schaefer & Moos, 2001; Nolen-Hoeksema & Davis, 2002）。死別に代表されるような強い悲嘆をもたらすような出来事でさえ、自己概念や世界観を否定的のみならず肯定的な方向にも変化させる可能性があるという。なお、測定尺度もいくつか作成されており、たとえば Joseph, Williams, & Yule（1993）、Tedeschi & Calhoun（1995）、Park, Cohen, & Murch（1996）、Hogan, Greenfield, & Schmidt（2001）、また日本では東村・坂口・柏木（2001）がある。これらの中には、肯定的側面のみに絞ったもの（Tedeschi & Calhoun, 1995; 東村他, 2001）と、否定的側面と肯定的側面を総合的にとらえようとする尺度（Joseph et al., 1993; Hogan et al., 2001）の両方がある。

以上のような動向をふまえ、本研究では、死別後のソーシャル・サポートと肯定的および否定的な心理的变化、さらに現在のサポートと精神的健康との関連について検討することとした。基本的な仮説は、死別体験後に周囲から必要に応じてサポートが得られるような対人関係をもっている人は、死別後の否定的な心理的变化が少なく、むしろ肯定的な変化が促進される。そして、死別後のソーシャル・サポートと心理的变化は、ともに現在の精神的健康に影響する、というものである。

なお、本研究のデータは、航空機事故の遺族研究プロジェクト（安藤, 2001; 福岡,

2001を参照)の一環として、今後予定している航空機事故遺族への調査および無作為抽出による一般成人対象の調査のために実施した予備調査によるものである。その一部は、別途松井・安藤・福岡(2002)、安藤・福岡・松井(2002)で報告されている。

方 法

調査対象

関東・関西の計5大学の学生とその家族を調査対象とした。有効回答者1253名中、身近な人との死別経験が「ある」と回答した人は1042名であり、年齢の分布を考慮して18-24歳の若年層と40-59歳の中年層に限定した。さらに、死別後の状況を尋ねることから、最も衝撃あるいは影響を受けた死別体験からの経過年数が10年未満の人のみを抜粋した。欠損値を除いた最終的な分析対象者数は、若年層が384名、中年層が159名であった。

手続き

講義中に研究目的を説明した後、受講生には原則として集合調査形式で実施した。さらに協力を承諾した学生に対しては、家族用の調査票を自宅へ持ち帰るかあるいは郵送してもらい、成人男女にも回答を求めた。なお、家族用の調査票の回収は、いずれも郵送とした。調査の実施時期は、2001年12月から2002年1月であった。

分析対象項目

調査内容は多岐にわたるものであったが、本研究では以下の諸項目を分析対象とした。

- ①回答者の属性：年齢、性別、職業など。
- ②死別体験の属性：「最も強い影響を受けた死別」に関して、続柄、死因、死別後の悲嘆(死別の後悔と辛さについて、各4件法の合計)、死別後現在までの経過年数など。
- ③死別後および現在のソーシャル・サポート：福岡・矢富・竹内・西堀・大山・鈴木(2001)を参考に、家族・親戚と友人その他について、同内容で各10項目(情緒的、手段的各5項目)を設けた(項目内容はTable1を参照)。回答方法は、死別後については「1.いなかっ

た」「2.一応いた」「3.確かにいた」、現在は「1.いない」「2.一応いる」「3.確かにいる」の各3段階とした。

④死別後の心理的变化：詳細は安藤他(2002)を参照。先行研究を参考に、肯定的変化(例：生命の大切さを実感するようになった)と否定的変化(例：新しいことに取り組もうという意欲が乏しくなった)について各20項目を設定し「1.あてはまらない」から「4.おおいにあてはまる」までの4件法で測定した。本稿の分析では、安藤他(2002)により整理された各12項目を採用し、「肯定的変化」と「否定的変化」として合計点を算出した。なお、安藤他(2002)によれば、肯定的変化は「生への実感と感謝」「自信・成長」、否定的変化は「自己信頼感喪失」「死への恐れ」「他者・世界への不信」の内容を含む。本稿でこれらをまとめて得点化したのは、相互の相関の高さと後述する内的整合性の高さをふまえてのものである。

⑤精神的健康度：健康調査票 GHQ (General Health Questionnaire：日本語版は中川・大坊, 1985)の12項目版を使用した。採点はいわゆる GHQ 方式(4件法の回答に0-0-1-1点をあてる)により合計点を算出した。低得点ほど精神的に健康であることを示す。

結果と考察

ソーシャル・サポートの測度に関する検討

本研究で独自に作成したため、尺度構成に関して検討した。検討は若年層、中年層に分けておこなったが、結果は基本的に同様であった。

最初に、3件法のため単一の選択肢に3分の2以上の回答が集中していた2項目(情緒的、手段的各1項目)を削除した。その後、項目間相関を確認のうえ、家族と友人それぞれについて死別後と現在の別に主成分分解・プロマックス回転の因子分析をおこなった。いずれも情緒的・手段的の2因子構造であったが、因子間相関は0.46~0.62と比較的高かった。そこで家族と友人込み(16項目)で再度同様に因子分析したところ、死別後、現在ともに家族と友人の明瞭な2因子構造であり、サポート内容よりもサポート源によって

因子が構成されていた。そこで、死別後と現在でそれぞれ単純加算により「家族サポート」「友人サポート」の得点を算出した。削除 2 項目を除く 8 項目の内容は、Table 1 に示すとおりである。なお、このようにサポート源別に因子が構成されるのは、福岡 (2000) と共通する結果である。

各変数（尺度）の基礎統計量

ソーシャル・サポート、心理的变化、精神的健康の各変数について、中年層と若年層の別に基礎統計量を算出した。分布の極端な偏りはなく、内的整合性を示す α 係数は、いずれも 0.78 以上であった (Table 2)。

Table 1 ソーシャル・サポートの項目内容 (要約)

1. あなたの気分をなごませたり、くつろがせてくれる人
2. ふだんやらなくてはならない用事を手伝ってくれる人
3. 不満や悩みやつらい気持ちを受けとめ、耳を傾けてくれる人
4. 日中に外出するとき、必要なことを代わりにやってくれる人
5. 困ったことやわからないことがあるとき、相談にのってくれる人
6. 1 日以上留守にしなくてはならないとき、その間の世話をしてくれる人
7. 物事を決めなくてはいけないとき、参考になる意見を言ってくれる人
8. 身体の具合が思わしくないとき、面倒をみてくれる人

回答者および死別体験の諸属性との関連

ソーシャル・サポート、心理的变化、精神的健康の各変数と、回答者および死別体験の属性との関連性を調べた。その結果、死別後のソーシャル・サポートに関しては、若年層の場合には、男子よりも女子の方が、また死別直後の悲嘆が強いほど多くの家族および友人サポートを得ているという結果であった。中年層では、故人との続柄として実父母との死別で他の死別よりも、また悲嘆が強いほど、家族サポートを多く得ているという結果であった。その他、回答者の年齢、故人の年齢、死別後の経過期間等も、一部の変数と有意な関連性が認められた (Table 3 を参照)。

これらの結果は、回答者ならびに死別体験の属性によって死別後のソーシャル・サポートが異なるという結果である。悲嘆の強さとサポートとの正の相関は、死別体験それ自体の重篤さを反映するものと思われる。従来の研究でも、生活ストレッサー経験がその後のサポート受容を促すことが指摘されている (Dunkel-Schetter & Bennett, 1990)。

死別後のサポートと諸変数との相関

ソーシャル・サポート、心理的变化、精神的健康の相互関係について検討した。先の分析で有意な関係の認められた属性変数 (若年層：回答者性別・年齢、続柄、悲嘆、経過期間、故人年齢、中年層：故人年齢を除く 5 変数) を統制し、偏相関係数として算出した。結果は若年層と中年層でほぼ同様であり、まず死別後のソーシャル・サポート (家族、友人とも) は、死別後の肯定的な心理的变化と正

Table 2 各変数（尺度）の基礎統計量

変数 (尺度)	若年層			中年層		
	平均	SD	α 係数	平均	SD	α 係数
①死別後・家族 SS	16.23	4.96	0.91	17.96	4.73	0.93
②死別後・友人 SS	14.30	4.72	0.91	14.53	4.80	0.93
③肯定的変化	25.71	7.59	0.90	25.21	8.80	0.95
④否定的変化	18.15	4.50	0.78	16.02	3.65	0.80
⑤現在・家族 SS	19.45	4.13	0.89	20.16	3.94	0.92
⑥現在・友人 SS	17.14	4.31	0.90	15.19	4.31	0.91
⑦精神的健康 (GHQ)	5.99	3.29	0.81	4.21	3.55	0.86

注) SS = ソーシャル・サポート

Table 3 回答者および死別体験の属性との相関係数

変数 (尺度)	回答者性別 ¹⁾	故人との続柄 ²⁾	直後の悲嘆	回答者年齢	死別後期間	故人の年齢
①死別後・家族 SS	0.27***	0.07	0.19***	0.00	0.07	0.11*
	0.10	0.16*	0.16*	0.02	0.13	0.09
②死別後・友人 SS	0.26***	0.08	0.19***	0.03	-0.10	-0.02
	0.06	0.01	0.11	-0.03	0.12	-0.07
③肯定的変化	0.10*	0.16***	0.41***	-0.03	-0.09	-0.18***
	0.13	0.01	0.20*	-0.08	-0.05	-0.11
④否定的変化	0.09	0.02	0.23***	-0.10*	-0.12*	-0.27***
	0.30***	-0.19*	0.12	-0.16*	-0.02	-0.06
⑤現在・家族 SS	0.38***	-0.01	0.25***	-0.09	0.07	0.03
	-0.01	0.11	0.04	-0.04	0.20*	0.06
⑥現在・友人 SS	0.33***	-0.05	0.15***	-0.04	0.05	-0.03
	-0.06	0.04	0.08	0.05	0.10	-0.05
⑦精神的健康 (GHQ)	-0.07	0.02	-0.06	-0.05	0.05	0.06
	0.27***	-0.06	0.04	-0.02	-0.07	0.05

¹⁾ 男性 = 1、女性 = 2²⁾ 回答傾向をふまえ、実父母 = 1、その他 = 0 とした

***p < .001, **p < .01, *p < .05

Table 4 ソーシャル・サポート、心理的变化、精神的健康の相互関係 (偏相関係数)
(上段：若年層、下段：中年層)

変数 (尺度)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
①死別後・家族 SS	----	0.60***	0.28***	-0.20***	0.58***	0.34***	-0.10 ⁺
②死別後・友人 SS	0.45***	----	0.31***	0.06	0.36***	0.48***	-0.05
③肯定的変化	0.21**	0.25**	----	0.18***	0.25***	0.25***	-0.27***
④否定的変化	0.07	0.05	0.20*	----	-0.09 ⁺	-0.04	0.15**
⑤現在・家族 SS	0.58***	0.27***	0.17*	-0.02	----	0.49***	-0.18***
⑥現在・友人 SS	0.33***	0.61***	0.28***	-0.02	0.40***	----	-0.13*
⑦精神的健康 (GHQ)	-0.10	-0.13	-0.14 ⁺	0.22**	-0.22**	-0.14	----

注) SS = ソーシャル・サポート

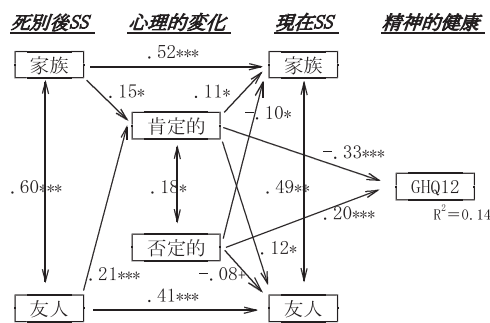
***p < .001, **p < .01, *p < .05, ⁺p < .10

の有意な関係にあった。そして、肯定的な心理的变化は、現在のサポートおよび精神的健康度とも有意に関連していた。精神的健康度は、否定的な心理的变化および現在のサポートとも関連していた (以上 Table 4)。

さらに、上記の結果をふまえ、また変数間の論理的な関係性を考慮して、仮説的に「死別後のサポート→心理的变化→現在のサポート→精神的健康」という因果関係を仮定したパス解析をおこなった。その際、偏相関係数の算出時と同じ変数群を統制した。その結果、おおむね先の偏相関分析に準じた関連性が認められ、特にサポートに関しては「死別後の

友人サポート→肯定的な心理的变化→精神的健康」の有意なパスが、中年層と若年層に共通して認められた。(Figure 1、2 を参照)。

これらの結果は、死別体験後に周囲から必要に応じてサポートが得られた人は、死別後に肯定的な心理的变化を経験する傾向にあることを示している。そしてまた、死別後のソーシャル・サポートは、肯定的な心理的变化を促すことによって現在の精神的健康に影響することが示唆された。本研究の基本的な仮説はおおむね支持されたといえよう。なお、否定的な心理的变化とソーシャル・サポートの間には関連性がみられなかったが、若年層の



※有意水準10%以上ないし絶対値が0.10以上のものを記載。
***p<.001, **p<.01 *p<.05 +p<.10

Figure 1 パス解析の結果（若年層）

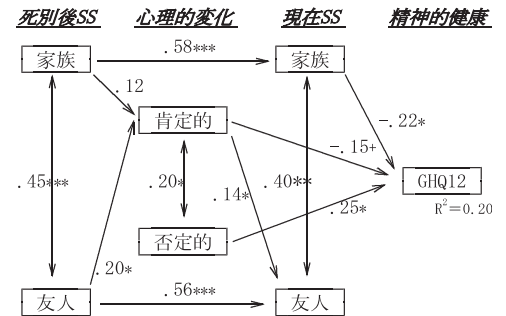
場合のみであるが肯定的な心理的变化は現在のソーシャル・サポートとも有意な正の関連性がみられた。死別後の心理的变化による対人関係への媒介的な影響が示唆される。

結 語

本研究の調査は回顧報告にもとづくものであるため、因果関係への言及は慎重でなくてはならない。しかしながら、死別後のソーシャル・サポートが肯定的な心理的变化をもたらし、さらにそれが現在の精神的健康を促すことの可能性は示唆することができたといえよう。身近な人の死を体験した後、周囲の人に支えられることによって、人はその死別体験を乗り越え、心理的な成長がいつそう促されるのかもしれない。今後の調査ではさらに測度の改善および分析モデルの精緻化を図り、死別体験におけるソーシャル・サポートの意義（および限界）について考察を深めたいと考えている。

引用文献

- 安藤清志 2001 航空機事故の遺族が直面する喪失 PSIKO (冬樹社), 21, 30-35.
- 安藤清志・福岡欣治・松井 豊 2002 近親者との死別による心理的反応(2) — 死別によって得るもの、失うもの — 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 530-531.
- Dunkel-Schetter, C., & Bennett, T.L. 1990 Differentiating the cognitive and behavioral aspects



※有意水準10%以上ないし絶対値が0.10以上のものを記載。
***p<.001, **p<.01 *p<.05 +p<.10

Figure 2 パス解析の結果（中年層）

of social support. In B.R.Sarason, I.G.Sarason, & G.R.Pierce (Eds.) *Social support: An interactional view*. New York: Wiley. Pp.267-296.

福岡欣治 2000 ソーシャル・サポート内容およびサポート源の分類について 日本心理学会第64回大会発表論文集, 144.

福岡欣治 2001 航空機事故遺族の心理的反応 ヘルス・サイコロジスト, No.27, p.4.

福岡欣治・矢富直美・竹内志保美・西堀好恵・大山直美・鈴木みずえ 2001 早期痴呆高齢者の家族におけるソーシャル・サポート — 患者への援助的行動、患者の心理的適応との関係 — 日本健康心理学会第14回大会発表論文集, 352-353.

東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫 2001 死別経験による成長感尺度の構成と信頼性・妥当性の検証 臨床精神医学, 30, 999-1006.

Hogan, N.S., Greenfield, D.B., & Schmidt, L.A. 2001 Development and validation of the Hogan Grief Reaction Checklist. *Death Studies*, 25, 1-32.

Joseph, S., Williams, R., & Yule, W. 1993 Changes in outlook following disaster: The preliminary development of a measure to assess positive and negative responses. *Journal of Traumatic Stress*, 6, 271-279.

松井 豊・安藤清志・福岡欣治 2002 近親者との死別による心理的反応(1) — 死別状況と直後の悲嘆との関係 — 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 528-529.

松井 豊・鈴木裕久・堀 洋道・川上義郎 1996 日本における災害遺族の心理に関する研究の展望 2 聖心女子大学論叢, 87, 258-233

中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社

Nolen-Hoeksema, S., & Davis, C.G. 2002 Positive response to loss: Perceiving benefits and

growth. In C.R. Snyder & S.J. Lopez (Eds.) *Handbook of positive psychology*. Oxford: Oxford University Press. Pp.598-607.

岡林秀樹・杉澤秀博・矢富直美・中谷陽明・高梨 薫・深谷太郎・柴田 博 1997 配偶者との死別が高齢者の健康に及ぼす影響と社会的支援の緩衝効果 心理学研究, **68**, 147-154.

Park, C.L., Cohen, L.H., & Murch, R.L. 1996 Assessment and prediction of stress-related growth. *Journal of Personality*, **64**, 71-105.

Schaefer, J.A., & Moos, R.H. 2001 Bereavement experiences and personal growth. In M.S. Stroebe, R.O. Hansson, W. Stroebe, & H. Schut (Eds.) *Handbook of bereavement research : consequences, coping, and care*. Washington, D.C. : American Psychological Association. Pp.145-167.

Stylianou, S.K., & Vachon, M.L.S. 1993 The role of social support in bereavement. In M.S. Stroebe, W. Stroebe, & R.O. Hansson (Eds.) *Handbook of bereavement: Theory, research, and intervention*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.397-410.

Tedeschi, R.G., & Calhoun, L.G. 1995 The post-traumatic stress inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, **9**, 455-471.

Tedeschi, R.G., Park, C.L., & Calhoun, L.G. (Eds.) 1998 Posttraumatic growth : positive changes in the aftermath of crisis. Mahwah, N.J. : Lawrence Erlbaum Associates.

Vachon, M.L.S., & Stylianou, S.K. 1988 The role of social support in bereavement. *Journal of Social Issues*, **44**, 175-190.

注

本研究の遂行にあたり、平成13年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(B)13410041)「航空機事故遺族の死別後の心理的反応と回復過程に関する研究」(研究代表者:安藤清志)の助成を受けた。なお、本稿は筆頭著者による日本健康心理学会第15回大会(2002)での発表内容を再構成したものである。

謝 辞

死別に関する質問への回答は、人によってはそれ自体がかなり辛い経験となる。本調査に協力くださった回答者の方々に、深く感謝の意を表します。また、調査の実施にあたっては各大学の先生方に大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。